

鈴木重三著『改訂増補 絵本と浮世絵—江戸出版文化の考察』

有澤，知世
神戸大学

<https://doi.org/10.15017/7363935>

出版情報：雅俗. 22, pp.116-120, 2023-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



鈴木重三著『改訂増補 絵本と浮世絵——江戸出版文化の考察』

有澤 知世

一、二種類の『絵本と浮世絵』

鈴木重三『絵本と浮世絵——江戸出版文化の考察——』（美術出版社、一九七九年）の改訂増補版である『改訂増補 絵本と浮世絵——江戸出版文化の考察——』（ぺりかん社、二〇一七年）は、鈴木氏が鬼籍に入られてから七年後、著者自らが要追記・訂正とした事項を反映し、さらに、編集を担当した木村八重子氏による編集者注が加わった一書である。

本稿稿者の手元には二種類の『絵本と浮世絵』があり、どちらをタイトルに掲げるべきかと悩んだが、旧版上梓後も絶えず資料を追究し、自身の研究を補訂・更新し続けた鈴木氏の姿勢と、その研究態度を尊重し、読者がよりよく論旨を理解できるよう編集された改訂増補版の在り方に思いを致し、こちらを取り上げる方が、著者の意向に叶うだろうと考えた。

改訂増補版の出版経緯とその編集方針は、本書の「編者あとがき」に詳しいため一々の記述は省くが、鈴木氏の希望で、①その後の研究で参照すべきもの ②より適切な図版およびレイアウト ③旧著の考証の誤認および誤植の指摘 ④カラーにすべき図版の

推薦 が編集委員会に課せられたといい、その方針に従い、鈴木氏が後に見出した資料の情報や追記メモ、そして最新の研究成果が注によって補われ、また、図版が適宜本文中に組み込まれている。こういった増補改訂作業の方針自体が、旧版出版から本書刊行までの三十八年間にどのように研究が進んできたのかを明らかにする機能をはたしているのである。

索引も含めると七五〇頁にも及ぶ本書は、大きく「絵本」「浮世絵」の二部で構成され、前者では、特に合巻や読本といった近世後期の版本について、そして後者では、春信・北斎・歌麿・広重・国貞といった大家の浮世絵について、全三十九本の実証的な論を収める。また、稀少な摺物等を含む図版を、カラー版も交えて大きく掲載するため、資料的価値も高い一書であるといえる。

二、江戸出版文化の研究

本書が収める論文の内容は多岐にわたるが、書名の副題にもあるように、（土地の意味での）江戸の出版界の様相についていくつもの新見が提示されており、現在の近世文芸研究の基礎となるも

が多い。

たとえば「富嶽百景」(四五三頁)においては、入念な諸本調査に基づき『富嶽百景』の書誌情報を整理し、出版事情について考察する。また、「資料にたどる歌麿の画業と生涯」(五八二頁)では、歌麿が大いに西川祐信や北尾重政の絵本を参照したことを指摘し、積極的な評価を与えただけでなく、寛政の改革以降の出版統制から受けた影響について指摘している。

近世期の出版物の研究は、行政の影響を考慮しなければ成り立たないが、そのスタンダードを示したのが本書であり、特に草双紙における出版統制の影響についての研究は、佐藤悟氏^①や佐藤至子氏^②らによってさらに発展し、今日の研究を推進している。

また、「千絵の海」をめぐって(四八〇頁)は、北斎晩年の揃いもの錦絵についての論考で、版下絵と校合摺、成版絵を比較検討して、校合摺と成版絵に対して版下絵が詳細であることに疑問を呈し、その理由について、もともと北斎が異なる企画で制作していた版下を、版元森屋治兵衛の新たな企画用に描き直したためであり、さらに、版元が抱える職人の技量を考慮して、描線を簡略化し、色面で効果を挙げるように改変したためではないかと論じる。

このように、様々なバージョンの資料を比較検討した結果に基づき、出版企画、画師・作者の工夫、彫師や摺師等の職人の技量、販売の在り方といった、出版にかかわるあらゆる工程に関して仔細に検討し、道筋を立てて論じた点が、本書の眼目であると思う。そしてその論が、国内外に存する膨大な諸本の細やかな観察の

成果に基づいて構築されていることは、特筆すべきであろう。

三、合巻研究の嚆矢

本書の大きな功績のひとつとして、合巻の学術的価値を提示し、高い研究水準を示したことがあげられる。

泉鏡花が草双紙を愛読したことは有名だが、明治以降も暮らしの中にあつたはずの合巻は、近世文学研究では長く重視されてこなかった。鈴木氏は「合巻の美術」(五十二頁)で、「合巻という呼び名は、一般の方々に耳慣れぬなじみの薄いことばと受け取られよう。(略)文学専攻者の間でもあまり顧みられないまことにはかない小冊子形態の挿絵入り伝奇小説ではあるが、少しく同情の眼で接してみれば、江戸後期にあつてはともかく小説の中核的存在の地位を占めて殿將の役目をつとめ、前代文学を庶民的な受けとめ方ながら一応吸収して、後代の物語性を重視する近代小説への橋渡しもしているという、あながち私どもと無縁でもない歴史的意義に気付く」と述べ、絵と文とを合致させて享受する文芸様式の源泉を絵巻物に求め、奈良絵本、そして木版の冊子本へと変遷してゆく様を描き出してみせて、明治の新聞小説へと回収されてゆくまで多くの人に親しまれた合巻の存在の大きさを提示した。

特に、「合巻の趣向」(八十八頁)や「近世小説の造本美術とその性格」(一一七頁)では、合巻絵画の取材源が絵巻や銅版画にまで及ぶことを特定し、その趣向を読み解くことで、合巻の魅力を存分に論じている。また、合巻の袋や表紙、絵題簽、見返し、口

絵といった、いわゆる本文の外形的要素に光をあて、図版を豊富に用いながら、その魅力を解き明かす。こういった表現が、文の作者の指示と、それに応えつつ独自の工夫を凝らした画師の技倆によりなされているという事実も、刊本と共に貴重な草稿本を掲出することで明解に示されている（「江戸後期の絵入版本」）。

こうした視覚的要素は、文学研究においてさして言及されないこともあるが、本書でなされたような書誌的事項の明解な説明と、作者が活用した素材の探索こそが、合巻という特殊な文芸ジャンルの豊かな「読み」を導き、また、当時の社会文化における位相を正しく明らかにするということを認識させられる。なお、鈴木氏による合巻読解の真骨頂、同氏が校注をつとめた『新日本古典文学大系88 修紫田舎源氏 上』（岩波書店、一九九五年）および『新日本古典文学大系89 修紫田舎源氏 下』（同上、二〇〇〇年）では、種彦による挿絵指示が含まれる草稿本も図版として掲載されており、合巻研究の上で留意すべき要点が読者に示されているため、併せて参照されたい⁽³⁾。

また、「近世小説の造本美術とその性格」では読本の装丁や挿絵に言及し、特に薄墨を使った表現に筆を割いている。たとえば山東京伝作・歌川豊国画の読本『善知安方忠義伝』（文化三年刊）巻之二の、妹との再会が幻であったことを悟り嘆く鷺沼太郎則友の挿絵の構図が、上田秋成『雨月物語』「浅茅が宿」の、廃屋となった我が家の前で嘆く勝四郎を描く挿絵を反転させたものであること、そして『善知安方忠義伝』初摺本においては、則友が一夜に見た妹錦木と、彼女の家の幻影が、薄墨によって摺られているこ

と、その鑑賞上の効果が併せて指摘される。薄墨の板は後摺本では省かれがちであることから、製作者の意図が十分に反映された初期段階の摺本を探索することが、こうした版本の趣向を正しく読み解くことにつながるという提言は（「馬琴読本諸版書誌ノート」）、諸本調査の重要性を改めて指摘するものであり、その研究に携わる者は常に心に留めたいものだ⁽⁴⁾。

四、和書をひらく身体

本書の魅力のひとつは、まるで推理小説を読んでいるかのように、鈴木氏が目の前の資料の謎をひとつひとつ解き明かす様を追認できることである。

たとえば、小枝繁の合巻『十人揃皿訳続』（文化九年刊）の刊本と、校合本（鈴木氏蔵）とを対比させた「校合本は語る」（二〇八頁）では、刊本で「於作」とされる幽霊の名が、校本では「於菊」であって、校合時の指示で改められたことを示し、この謎に迫る。すなわち、享和元年九月に徳川家斉の六男として生まれた男児が菊千代と名付けられたため、彼が文化十二年に元服し、斉順と改名するまでの間、菊の字の使用を憚らざるを得ない状況であったことが、この改変の原因であるとする。さらに鈴木氏は、それが「きく」の頭字と同じイ列音の「いく」や「りく」ではなく、「さく」とした理由について追及し、本文中に仮名文字でしばしば登場するお菊の名の「き」の一筆目横線を削ることで「さ」とし、手のかかる入木による修正を避けたのだという、スリリングな考

察を展開する。校合本の観察から、当時の検閲への対応の仕方にもまで論が及ぶ点も面白く、地道な資料探索が文学史に大きな示唆を与え得ることを教えられる。

また、こういった貴重な資料との出会いは、国内においてのみ得られるとは限らない。たとえば「象引」古図発見始末記」（五三二頁）は、鈴木氏がアメリカ滞在中に偶然見出した、鳥居清倍画歌舞伎十八番「象引」についての論考である。鈴木氏がこの図と対面した際、平木コレクシヨン（編者注は「平成二十五年四月一日より「公益財団法人平木浮世絵財団」とする）が所蔵する清倍画の「暫」と対をなす作品であることを即座に判断し、さらに、鳥居家五代目の清峯画「象引」が原拠とした幻の古図にあたるのが、清倍画「象引」であることに気づいたのだという。鈴木氏が偶然見出した浮世絵に抱いた既視感の正体を、過去に披見した資料群の記憶を紐解き明らかにしてゆく過程が順序だてて綴られる文の端々に、その時の緊張感と興奮、そして喜びが生々しく現出しており、読者もまた、それを追体験する。なお、鈴木氏はその後も、清峯画「象引」に記される考証文から、本図がどの演目によるものであるのか、また、同図の落款に「元祖鳥居清信図求応五代目清峯画」とあるのはなぜなのかと考証を重ね、無款の役者評判記に清信画説があるという事例を援用しながら、鳥居派における清信崇拜へと論を展開しており、浮世絵研究において、歌舞伎資料の考証が不可欠であることを、実例を以て後進に示しているのである。

このほかにも、本書で重要視され、未来の研究テーマとして提

言される「画題」や「名数」といったキーワードは、現在絵入本学会などにおいて盛んに議論される問題であり、今なお多くの着眼点と、研究への示唆を与えてくれる。

さて、本稿のしめくりとして特に述べたいのは、鑑賞者の身体性を十分に考慮した上で構築された論の瑞々しさである。たとえば、紙面を九十度回転させ、縦長画面としてデザインされた合巻の見返や口絵について論じたもので、『白縫譚』第三十四編の二図を取り上げた一節がある（一三九頁）。

上方の図は、同書の見返から扉の部分までを縦にして、天空高く浮揚する軽気球と中で遠眼鏡で下を見る武士を描く。下方の図はその次の丁で、遠眼鏡のレンズ中に映った心持で、円内に主役若菜姫と従者を描いている。前者では天空の高さがこの画面によつてよく表わされ、後者ではこの図を見る前に頁をめくるといふ動作の間が、遠眼鏡と対象との間の空間と距離感を想察させ、この心理作用がこの二図を巧みに連結させている。

鈴木氏の視点が合巻鑑賞者の指先にズームしてゆき、鑑賞者がそのページをめくると同じ間で視線を移してゆくような記述からは、柔らかな紙の質感さえも感じられ、小さな草双紙の中にちりばめられた趣向を読み解く愉しみを教えられる。便利なデータベース類が整備され、高精細デジタル画像が簡単に入手できるようになった今、草双紙や浮世絵を鑑賞する身体や時間のリアルさは、改めて意識されるべきであろう。

稿者が大学院に進学した頃には、鈴木氏はすでに泉下の人とな

られていて、残念ながらお目にかかることは叶わなかったが、本書を読むと、鈴木氏が和書をめくっておられるところを肩越しに拝見しているような感覚に襲われる。本の姿を、外側から順に丁寧に説明され、何がどのように描かれているのか、身体感覚を以て明快に記されているからであろう。

まだ実物を見たことのない稀少本であっても、本書をひらけばいつでも、鈴木氏の目を通してその姿が再現される。

注

- (1) 佐藤悟「草双紙における上紙摺の意義」(井上泰至編『資料論がひらく軍記・合戦図の世界——理文融合型資料論と史学・文学の交差——』(勉誠出版、二〇二二年)等。
- (2) 佐藤至子『江戸の出版統制——弾圧に翻弄された戯作者たち——』(吉川弘文館、二〇一七年)等。
- (3) 腮尾尚子「鈴木重三氏校注『修紫田舎源氏』を読んで」(『日本文学』59巻5号、二〇一〇年五月)において、その重要性が論じられている。
- (4) 『山東京傳全集』(ぺりかん社)「解題」では、薄墨の有無に着目した図版を伴う諸本の書誌情報が、鈴木氏によって示されており、諸本の位相や表現の差異を知る上で非常に有用である。